

て、可能性と展望一般をあれこれ論ずるのでなく、まさしく窮極的には武装蜂起、マッセンストへの態化を現的に体現し運動している革命の現実性から堅持、くりかえし、持続をなしとげること、これが政治的環である。だから何々のマッセンストの直接の物理的敗北が問題なのではなく、革命の敗北主義がそれにふさわしい日帝打倒、中露協力の政治内容と中央権力斗争への結合の目的意識性、つまりこれに於いて、何々の物理的敗北をのりこえて進展する多イナミスム、派及をこざわれくは望みうるし、それは全く現実的なることなのである。そして、市民社会の深部をくりかえし画生するマッセンスト、ソヴェエト的団結の形成を、その最も弱い環から無として確保し続けること、その心算評へ、ソヴェエト的工場へおしよげること、結合環を地獄ンギエト的展望——一時的象徴的幻の解放区か、その和直的現実化としておしよめること、かゝるとのこととして封鎖、バリ、占拠等を位置づけ、斗われることである。

① かくの特異をもつて進展した全四半回斗争は、現局面の中央権力斗争爆発への全階級の斗争環であり、その焦点は京大入試実力阻止斗争にせられた。東大斗争以降、斗争の昂場を代表したのは関西を中心とした地方と周辺である。東京は巨大、中人の根拠地をもつて、この全面的質量採擷を象徴的へ支えきつてきた。その入試時期の煮つまりの中で、この両極点は、権力の攻撃の前にうちくずされた。これは現局面を特殊を後退を東京では強いられたから、全体を関西と中心とした斗争で反撃し、4月選挙を決定的に相殺するべきことを意味している。

中大斗争は、21日の入試阻止、再び相殺斗争での主力を失った。このことは一中大斗争自体の困難性のみならず、全党派、東京全大斗争の實踐的相殺戦の一環後進したことであり、この相殺戦を全四半回斗争のなかで行なうければならぬ。そして4月の相殺戦の攻撃を、入試阻止斗争のためのやむを得ざる後退として再確認するところである。そして回数は4月斗争とそれへの2ヶ月全四半回斗争の地点的一環にふさわしい政治相殺場下が政治局下で不十分にはかきおこれていなかったこと、主体的克服を、以上のことと同等性の確認と当面の斗争の進展にたつてなしてけることである。

全四半回斗争の中心環は、今、関西にある。そしてその中心環は、四半一週に及ぶ入試阻止斗争にある。とりわけ、ソヴェエト社会での地位、斗争の質、政治的階級意識の鋭化から、京大斗争に全四半回斗争の進展をけん引するにやむを得ない。(斗争をけん引する) 救世と反革命、政府、大衆、民衆ヌマリーニスト

の一体となり、(斗争をけん引する) あり、その相殺戦をもつてはいる。

二案を確保しなればならぬ。一は、この相殺戦の相殺戦は(大衆) 入試場下の設定(公衆)をなし(段階) 日共、民青の京大相内計台前、全階級(派) 設定にある。これは、いわば、東大斗争における22%の相乗である。相乗すらもまきこんだ入試場下の幻想性、教壇、ゲハルトを、二案、これをのりこえることか、巨大な階級(階級) としてあることである。二案、その階級の下段をもつて相殺することである。可成り、全四半回斗争の相殺と公然と開始することか、二案、彼らにとつて、起死回生の大反撃の設定をより相乗にうちこいたことである。

これに代える道、それは、わが同盟の入りこいのもと、反帝諸党派、とりわけ中教協、全四半回斗争の相殺、どこに東大、日大、中大は、めく、京大斗争、相殺を代表した統一(統一) 斗争をけん引して進めること、それを多入試場下の斗争を回籠起息点として進めることである。同盟はずで、その斗争の仕組についており、スランドの四半回斗争は、統一(統一) 同盟のいかにかわらず総力を動員してはいることである。

3=1
全四結果 於 京大相計台前
一万青年総決定委員会

オ二は、これをなすことになって、多入試の実際の特殊をめぐり、関西を基軸に、政治勢力を全面的に相殺することである。

- ① 4/18 以上の緊急の仕組に打ちつた
- ② 4/18 中央権力斗争(前経)を、アメ大(中)相殺戦への一環としたことのみを、つよめ
- ③ 4/18 反帝諸党派(中核、M)共同声明とマク台に安定相殺戦(相殺戦)の進展を、
- ④ 全大斗争を内定した。また、日大(全)斗争(統一) 案をめぐり、全四半回大会を、(統一) 案をめぐり、